総　合　教　育　会　議　　会　議　録

会議の名称	令和３年度第１回山口市総合教育会議
開催日時	令和４年１月１１日（火）１４時～１５時
開催場所	山口総合支所　Ａ会議室
公開・部分公開の区分	公開
出席者	山口市長　　伊藤　和貴 山口市教育委員会 　教育長　藤本　孝治 　委員　　山本　晃久 　委員　　佐々木　司 　委員　　横山　洋之 　委員　　佐藤　真澄 　委員　　角川　早苗
事務局	総合政策部長　　中川　孝、総合政策部次長　　山田　豊成 企画経営課長　　宮原　尚規 教育部長　　兒玉　直也 教育総務課長　　河村　元博　、教育施設管理課長　藤原　茂 学校教育課長　　宮﨑　康生、社会教育課長　　江村　俊彰
次第等	【次第】 １会議 （１）市長挨拶 （２）会議 　・プレゼンテーション「教育・子育てなら山口」をめざして　藤本教育長 　・意見交換 【資料】 ・次第 ・「教育・子育てなら山口」をめざして

内容	１　会議開会 　　１４時　開会 ○兒玉教育部長 　それでは、ただ今より、令和３年度第１回山口市総合教育会議の会議を開催いたします。 　私は、この会議の進行を務めさせていただきます、教育部長の兒玉です。よろしくお願いいたします。 　それでは、最初に、本会議の主催者でございます伊藤市長が、御挨拶を申し上げます。 （１）市長挨拶 ○伊藤市長 　それでは、総合教育会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。 （２）議事 ○兒玉教育部長 　それでは、会議に移らせていただきます。 　まず、藤本教育長から「『教育・子育てなら山口』をめざして」と題しプレゼンテーションを行います。その後、皆様から御発言をいただきたいと思います。 　それでは、藤本教育長、お願いします。 ○藤本教育長 ～プレゼン資料に基づき「『教育・子育てなら山口』をめざして」～ 概要 ・フィンランドの教育に学ぶ 　教師の社会的認識における日本との違い 　少人数学級での学び　等 ・現状把握・現状認識 ・教育を取り巻く環境 ・山口市の将来人口推移と高齢化率 ・児童生徒・教職員・保護者・地域住民の「強み」と「課題」 　市内市立中学校長からのアンケートを基に ・伊藤市長の施策方針 ・山口市教育への教育長としての思い ・第三次山口市教育振興基本計画に向けて 　教育目標及び育みたい力の見直し ・山口市教育改革の視点 　（１）本物の学力をめざした学びの改革 　　・めざす授業像

・ＩＣＴ（タブレット端末、電子黒板）を活用した授業実践例
山口情報芸術センター（ＹＣＡＭ）との連携　等
・大学等との連携による学力向上
・学校運営協議会・地域との連携による学力向上
（２）豊かな心を育む学びの改革
・総合単元的な道徳教育の推進
・「魅力ある学校づくり」の取組の実証検証
（３）学校・家庭・地域との連携・協働による学びの改革
・学校運営協議会の活性化
・児童・生徒参画型の「熟議」
小郡中学校での実践例を中心に
・学校支援の実践例
・地域貢献の実践例
「湯田中学校ひろば」の取組例を中心に
・コミュニティ・スクールの可能性
コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへ
学校は子どもと地域住民の学びの共同体
学校運営協議会に子どもたちの声を反映
子どもたちの心のよりどころとなる居場所として
地域住民への成果
・これからめざす山口市教育のコンセプト
「コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育」
今後9年間の系統的な学びをつなげていくことで本物の学力を培う
縦（小中一貫教育）からと横（コミュニティ・スクール）からのアプローチ
・若者の定住実現に向けて教育からのアプローチ
・予測困難な時代における子どもの生きる力

○兒玉教育部長
ありがとうございました。それでは、これより意見交換に移ります。時間は約３０分を予定しております。
ただいまのプレゼンテーションでは、教育における山口市の現状や教育改革の視点、これからめざす姿などについて学校教育を中心に説明いただきました。
これから意見交換をいただく中で、少しテーマを絞らせていただきます。１つ目は「地域連携教育」と「小中一貫教育」について、２つ目は「ＩＣＴ教育」と「ＹＣＡＭ連携」についてでございます。
まずは「地域連携教育」と「小中一貫教育」について、市長、よろしくお願いします。

○伊藤市長
昔、盛んに言っていた学校教育と社会教育の連携「学社連携」が実現したなという気

	がしました。 　また、写真に写っている子どもの笑顔が心からの笑顔という感じがいたしました。 　それと小郡中学校においては、やらされている感が全くなく、生徒が自らやっている姿が感じ取れました。いつからこういった取組みが実現されたのでしょうか。 ○宮﨑学校教育課長 　去年ごろから少しずつ児童・生徒参画型の子どもたちが主役になるような学校運営協議会の持ち方を、各学校にお願いしていた中で、学校がそこの部分をしっかりと、生徒会等を巻き込みながらやってくださいました。 　小郡中学校は、大人の予想をはるかに上回っている状況でございまして、これを継続というか、引き継がれていくことが大事かなと思います。 ○藤本教育長 　管理職の考え方というか、意気込みは随分変わってきました。 　最初は行政からの指示でやっているという感じでしたが、見える化によって、子どもたちにとってプラスになり子どもたちが変わってきたという感じです。 　小郡中学校だけでなく、他の中学校でも前向きに取り組まれており、それを支えてくださる地域の方々あってのものだと感じています。 ○伊藤市長 　学校は人事異動によって教職員がどんどん変わっていきますが、どのように取組みを引き継いでいかれるのでしょうか。 ○藤本教育長 　取組みの維持というよりも、新しい感覚を取り入れていって、取組みをさらに良いものにしていければと思っています。 　また、教員が代わっても地域の方や保護者の方は変わらないです。 　地域の後ろ盾はすごく大きいです。 ○伊藤市長 　これからの地域を考えるときに、小中一貫教育の視点は、新しいチャレンジになりますが、そのあたりについて、教育委員さんの御意見を伺いたいです。 ○佐々木委員 　正直、山口市の小中一貫教育はもっと進んでほしいという思いがありました。萩市や岩国市に先行されている現状があります。 　山口市は小中一貫教育を前面には出してこなかった部分がありますが、では後を追うだけなのかというと、山口市には他県にも誇りうるコミュニティ・スクールの基盤があるので、施設一体型といっただけでなく、教職員を一体的に進めていく、また路傍塾と

いったものもあります。
　そうしたことを進めれば、山口市なりの小中一貫教育ができるのではないかと思っています。
　先程の生徒会長の発表は素晴らしいものがありました。教育委員に生徒一人を加える、突拍子もないと思われるかもしれませんが、アメリカでは実践されています。ただ、様々な制約もあることから、夏や冬の年何回か、準委員となるといった形ではあります。
　例えば、数名が生徒会の代表者として教育委員会に来て、学校に持ち帰るなど、これだけコミュニティ・スクールをベースに参画する機運が高まっているので、その参画が教育委員会にも繋がれば良いなと思います。教育委員会の議論も活性化し、それをまた、生徒を通じて各学校に持ち帰り、地域の方も巻き込んでというような動きが出来るのではないかと思います。

○伊藤市長
　法律上可能なのでしょうか。

○佐々木委員
　教育委員会規則を改正すれば可能であると思います。実現すれば日本初でしょう。ただ、数年のうちに他市でやり始めるのではないのかと思います。コミュニティ・スクールとも連携させてということも考えられるのではないかと思います。
　そうしたベースが山口市には出来ています。

○山本委員
　いろいろな意味で「低年齢化」しています。私の実感ですが、歌にしてもダンスにしても、低年齢化した子どもが増えてきています。
　そんな中、今の熟議を通して、子どもたちがパーソナリティを示している。これも低年齢化の一つです。いわば、彼らは本物に接していく。この本物がどんどん進んでいけば、教育委員会に子どもが参画することは可能なのかなと思います。教諭をやっているときに感じましたが、子どものみでも様々なことができます。
　例えば、学芸会のシナリオ、大道具係、全てを子どもに任せ、先生は本当に助言だけとしても、やってみたら、子どもって本当に動くのですよね。すごい能力を発揮します。
　卒業式のビデオ作成を呼びかけたときにも、私は一切関わらなかったのに、素晴らしいビデオが出来上がりました。形に残ればやれるわけで、子どもたちにそういう足跡を残してあげようという取組みをやっていけば、子どもは限りなく力を発揮していくものだろうなと思います。
　ただ、難しいのは先生側だと思います。先ほども話がありましたとおり、人が変わった時に子どもたちが変わらないようにするためには、やはり先生たちの使命感を醸成していく必要があります。先ほど、アメリカの話がありましたが、アメリカの学校では、先生方は地域から雇われています。だから、ちょっと間違えたとしたらクビになります。その危機感があるから、一生懸命にやるのです。やっぱり先生方も、子どもたちの将来

	を担っています。そんな使命感をしっかりと持って、子どもたちにどう助言するか。今、生徒会の子どもたちがあれだけ動けるようになっている。そのための「差し水」とは、難しい話なのですよね。でも、やってらっしゃる。そういったノウハウを共有しながら、先生方に力を付けていくということも大事なのかなと思います。 ○佐藤委員 　私自身は地域福祉が専門ですが、先程の子どもたちを主役にしたら子どもが伸びたという話は、参加される地域の方も同じだと思っています。地域の方たちをどれだけお客様でなく主役にするか、それは学校の先生が地域の人たちにどれだけゆだねられるかというところなのかなと思いました。 　その結果、地域の人たちの自己有用感や自己肯定感とかが高まると、その人たちが自信を持って行動することが、子どもたちのリスペクトにつながっていって、自分たちも「山口市の大人になっていきたい」とか、「山口市で年を取っていきたい」ということになるのです。 　そういうふうに全て良い循環になっていくと良いなというふうに思いました。 　ただ、私は今、教員養成課程にいるのですが、どうしてもそれを、どこまで今の教員の方々が生徒に伝えていけるのかが難しくて、次のＩＣＴとかにもつながるのですが、あらゆるものがこれからの教員に求められている中で、今がちょうど境目だと思っています。これから大学生になっていく若者はそういう教育を受けているのですが、今の教員を目指している学生たち、今の若者世代と呼ばれる人は、どこまで地域の概念がいっているのかなとか、ＩＣＴも少し取り残されています。現状では、高校生のほうがずっと詳しいです。 ○横山委員 　私は小郡中学校の熟議に参加していましたが、小郡の場合、地域づくり協議会と小郡中学校で話し合いがもてます。なぜかというと「コロナで人が集まるのが難しい時にどうしたら良いのか、意見が欲しい」という話が直に来て、「地域探訪だったら、地域の人たちが回るところに待っていて説明とかが出来るよ」ということで、私は始まったと思っております。 　熟議に関して言いますと、これも地域づくり協議会で人を集め、各部の方に出ていただいたりしたのですが、本当に短い時間、３０分もないぐらいの熟議を、私たちの意見がパッと出せるように、生徒がきちんと説明をしてくれて、まとめ方にも感心しました。 　子どもたちが自ら考えて「こういう人を集めてほしい」とか「こういう話が聞きたい」と言ってくるので、地域づくりとしても動きやすいというところです。 ○角川委員 　保護者として教育委員として入らせてもらっていますが、コロナ禍のなかで、保護者は様々な不安があります。そうしたときに小中連携もそうなのですが、幼稚園から小学校にあがるときの不安はすごく大きいです。個の時代で、誰にも相談できない方がたく

	さんいらっしゃいます。そういう方たちが、地域の人たちと一緒に学んでいくことによって、ちょっとしたつながりが出来るのが大事なのかなと思います。 　教育委員としてちょっと前に、仁保に行かせてもらったのですが、仁保幼稚園のグラウンドと仁保小学校のグラウンドが隣接していて、幼稚園で遊ぶ子どもたちが、小学校で遊ぶお兄ちゃんたちをいつも見られる状況であることはすごく良いなと思いました。お母さんたちが子どもたちを連れて行く時に、小学校の様子がよく分かるのも、「自分たちの子どもが大きくなったらここへ行くのだな」というのが見える。そういう常に見えるというのはすごく安心です。もっと他にも活かして、幼稚園と小学校で連携していけたら、すごく良いなと思いました。 　フィンランドのように、小学校に上がる前のあの１年間はすごく大事ですよね。日本は、幼稚園から小学校に上がった途端、急に勉強のスイッチが入ってしまいます。あの１年があることで準備が出来るので、日本もそうなったら素晴らしいと思います。 ○藤本教育長 　確かにあの1年で様々なことが学べますね。 ○兒玉教育部長 　もうひとつのテーマでございます、ＩＣＴとＹＣＡＭ連携については、市長からどうでしょうか。 ○伊藤市長 　ＹＣＡＭは、２０年前に私が立ち上げたと言うのはおこがましいですが、１０年間で苦労して立ち上げてきました。その時の思いが、「山口市で育つ子どもに、最先端の表現を常に接してあげたい」「将来、大学に行って就職しても、『山口で育った子どもはちょっと違うね』という子どもにしっかり育てていきたい」という思いでした。 　教育カリキュラムのところでマッチングが難しいということでしたが、教育長にもう一度お願いをしたら、チャレンジしてみようという話になりました。 　ようやくこの１、２年で、ドローンやスポーツハッカソンにしても、ひとつのかたちのアウトプットが出来つつあると実感いたしております。 　これがすべてとは思いませんが、芸術体験できる山口市というような、山口市の新しいプログラムにつながるなと思った次第でございます。 ○山本委員 　ちょうど７、８年前、大殿小の校長であったときに、当時の課長から「ＹＣＡＭの今の活動を各学校に普及したい」という相談がありました。 　アドラー博士の言葉の中に、「御用聞きくらいがちょうどよい」つまり、押し売りになってはいけない。消費者が求めているものに対して、御用聞きというのは、あれはどうか、これはどうかとは決して言わない。向こうから何か要求があれば、それに一生懸命応えて、それぐらいで子どもは勇気づくと言う話があります。

	それと同じように、学校はたくさんのカリキュラムの中で運営していますから、ＹＣＡＭも取り入れるとなると、やっぱり学校に求めが無いと難しいところがあります。「何かお手伝いできることないですか」というメニューを、しっかり学校に啓発していくことが必要と思っています。 併せて、ＩＣＴについてずっと悩み続けていることがあります。今、先の見えない時代にＩＴがどう進むのだろうか。例えば、漢字ひとつとっても、その書き順や形についてはタブレットで学べますが、漢字を書くことに関しては、度重ねて書かないと身につきません。ひょっとしたら、先の見えないＩＴの時代において、書くこと自体が無くなってしまうかもしれません。学校教育に携わる我々にとって、私たちが若かりし頃に学んだ認知論であるとか、学習理論については決して捨ててほしくない。それがあるがゆえに、このＩＴが活きてくるという立場にたって、夢は与えていきたいと思っています。 ○藤本教育長 ＡＩができないものはあると思いますので、そこは大切にしたいと思います。 ○佐藤委員 今、「情報芸術とは何だろう」というのを考えています。法改正によって、教員免許でかなりのものが削られています。教育学部のカリキュラムの中で、不要と言われるものがどんどん外されてしまっていて、例えば「教科は勉強しなくても、指導方法だけ勉強すればいい」とか、「ＩＣＴばかり勉強しましょう」とか、そこに重点が置かれます。しかし、芸術とかの不要と言われたものの中にこそ、先ほどで言う人間性といったものが育っていくのかなと思います。何を大切にして、何を切り捨てていけば良いのかというところが、すごく悩んだり、考えたりしています。 リベラルアートというもの、ＹＣＡＭは私たち大人が行ってもすごく楽しいですよね。楽しい中で、ＩＣＴを学べる環境は山口ならではだと思うので、それが活きたら良いなと思っています。 保護者の立場で少しだけ思うのが、小さい学校のみでなく、大きい学校でも少しずつ連携の機会を増やしていけたら良いなと思いました。 授業のひとつとして、ＹＣＡＭに行くとか、そういうことは出来ますか。 ○兒玉教育部長 学校が希望すれば社会見学などで可能です。 ○佐藤委員 行けたらいいですね。削られていく中でも、芸術だけは残っていくと思います。子どもたちが小さなうちから触れられる山口市は、すごく贅沢な環境だと思うので、是非してほしいです。

	○伊藤市長 　体験する前の自分と後での自分の変化を見つめることが芸術体験であると思いました。そうした体験ができるのがＹＣＡＭですね。 ○兒玉教育部長 　それでは、お時間も過ぎてしまいましたので、また、他の件については別の機会でということで、よろしくお願いいたします。 　それでは、最後に市長、よろしくお願いいたします。 ○伊藤市長 　短い時間でありましたが、山口市の教育の方向性は間違いないという実感を今、しております。 　これからまた、教育委員の皆様には引き続き、御支援をお願いできたらと思います。 　本当によろしくお願いいたします。 　今日はありがとうございました。 ○兒玉教育部長 　ありがとうございました。 　それでは本日の会議を全て、終了させていただきます。皆さんお疲れさまでした。